

説教 『しぶとく生きる』山本 護牧師
聖書 イザヤ書 40：27～31／ルカ福音書 18：9～14

伝道所の庭では、先住者である野の草花と、入植者たる人為植物との調和をめざしている。だから蔓性植物には幾度も草刈り機を当てる。そんな折、隣地に繁茂する葛のしぶとさに閃くものがあった。

「主に望みをおく人は新たな力を得(イザヤ 40:31)」。「望みをおく」とは「待ち望む」こと。「待ち望む」のヘブライ語の語源は「綱／巻きつく」。つまり主に望みをおくことは、葛のようにしぶとく絡みつくイメージで、大和魂のような虚構の潔さではない。「新たな力を得る」現実を、葛に教えられた。

「わたしの裁きは神に忘れられた」と嘆くほど(40:27)、民は絶望していた。そんな民に対し、預言者は主(ヤハヴェ)という自分たちの神が、どういう方であるかを示し(40:28)、「疲れた者に力を与え、勢いを失っている者に大きな力を与えられる(40:29)」と励ました。それにしても、ざっと眺めただけで「倦む」、「疲れる」、「倒れる」、「弱る」という否定的な言葉が目につく。老人や病者が疲れ倒れるのではない。「若者は倦み、疲れ、勇士もつまずき倒れようが(40:30)」と、活力みなぎる若者や勇士がそうなるのだ。それほどに絶望的な状況下であっても(40:27)、「主を待ち望む」しぶとさで生きる。

「主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れぬ(40:31)」。八ヶ岳に鷲はいないが、想像はできよう。屹立する岩山に鷲がとまっている。翼はたたまれ、目は鋭く地上を凝視している。静かなこの内的緊張が、そのまま「主に望みをおく」不屈さを物語ってはいまいか。静けさの内に力がみなぎっている。緊張が解かれ、身体の数倍はあろう翼が開かれると、鷲は空高く舞い上がってあたかも神に近づく、そんな姿が思い浮かぶ。

どんなに絶望的な状況にあろうとも、「主に望みをおく人」は神の御前にあって、「走っても弱ることなく」、どこまで「歩いても疲れぬ」。私たちは、孤高の鷲のように格好良くはない。だが葛のようにくり返し刈り払われても、倦むことなく、疲れぬ。このしぶとい不屈さは、鷲よりもずっと現実的だと思う。葛のような姿で「主に望みをおく人」、これが偽らざる私たちではないだろうか。

イエスは譬え話で、「主に望みをおく」しぶとい人を語る。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった(ルカ 18:10)」。ファリサイ人は敬虔で模範的な生き方をしている(18:11~12)。徴税人は「遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った(18:13)」。どうにもならない自分の「罪」にうつむくばかりで、「神様、罪人のわたしを憐れんでください(18:13)」とボソリとつぶやいた。そして、「義」とされたのは徴税人であった(18:14)。

徴税人は「人間誰だって罪人」という逃げ口上を言わず、ただ率直に罪なる「わたしを」隠さずに現した。模範的なファリサイ人の「わたしは(18:11~12)」と、嘆く徴税人の「わたしを(18:13)」では、何か違いがあるのか。まるで違う。前者の「わたしは」は通常の主語だが、後者の「わたしを」は神に憐れんでもらうより他ない、いわば目的語。つまり徴税人が思い描いている主体は「神」、なのだ。徴税人、自分には絶望したが、「主に望みをおく(イザヤ 40:31)」ゆえに「大きな力が与えられる(40:29)」。

《おまけのひとこと》

思いは鷲のように高く飛び 身体は蔓植物のごとく地にからみつく 往生際が悪いという非難 私には当たらない 気に入らないなら 常に生きることを優先させる キリストに文句を言ってくれ